

京都大学 大学院工学研究科・工学部
概要 2026

京都大学

大学院工学研究科・工学部

概要 2026



編集・発行

京都大学 工学研究科・工学部 広報委員会

京都大学桂地区（工学研究科）事務部 総務課 企画広報掛

〒615-8530 京都市西京区京都大学桂

TEL : 075-383-2010 <https://www.t.kyoto-u.ac.jp/>

令和 8 年 7 月発行



京都大学 工学部・大学院工学研究科 Web サイト



京都大学
KYOTO UNIVERSITY

目 次

1	京大工学の理念・ビジョン	2
2	新しい動き	3
3	寄附講座・産学共同講座	8
4	沿革	9
5	組織	11
6	工学部の学科	13
7	工学研究科の専攻	15
8	附属教育研究施設等	18
9	国際交流の状況	21
10	京大工学基金のご紹介	23
11	工学部・工学研究科の同窓会	23
12	財政状況	24
	データ	25
	アクセスマップ	29



工学研究科Webサイト
「動画で見る工学」



1 京大工学の理念・ビジョン

京都大学は「自由の学風を継承し、発展させつつ、多角的な課題の解決に挑戦し、地球社会の調和ある共存に貢献する」ことを目的とし、基本理念を定めています。その基本理念を実現するために、京都大学大学院工学研究科・工学部の理念・目標とビジョンを以下のように定めます。

京都大学大学院工学研究科・工学部の理念と目標

● 理 念

学問の本質は真理の探求である。

その中であって、工学は人類の生活に直接・間接に関与する学術分野を担うものであり、分野の性格上、地球社会の永続的な発展と文化の創造に対して大きな責任を負っている。

京都大学大学院工学研究科・工学部は、上の認識のもとで、学問の基礎や原理を重視して自然環境と調和のとれた科学技術の発展を図るとともに、高度の専門能力と高い倫理性、ならびに豊かな教養と個性を兼ね備えた人材を育成する。

このような研究・教育を進めるにあたっては、地域社会との連携と国際交流の推進に留意しつつ、研究・教育組織の自治と個々人の人権を尊重して研究科・学部の運営を行い、社会的な説明責任に応えるべく可能な限りの努力をする。

● 目 標

工学研究科・工学部は、工学のあり方と部局としての使命を次のように考える。

上に述べた理念を使命とし、構成員個々の「主体性」を尊重する「自由の学風」を継承しつつ達成することが、工学研究科・工学部の基本的目標であり、より具体的には自由闊達な知的活動から生み出される知と技術の創造とその継承を目指すことである。

京都大学大学院工学研究科・工学部のビジョン

確かな基礎から未知へ 統合知で未来をデザインする

研究 テクノサイエンスと学際連携による次世代社会のデザイン

基礎科学を基盤にサイエンスとテクノロジーを融合する「テクノサイエンス」を強力に推進します。分野を超えた知の結集や産学連携から新たな科学の種を生み出し、複雑な社会課題の解決と新しい社会のデザインを目指します。

教育 確かな基礎力に裏付けされた研究を通じた教育

「自由の学風」のもと、確かな基礎力を徹底して培います。その上で、研究を通じて自ら課題を見出し解決する力を獲得する教育を行います。

人材育成と産官学連携 統合知を備えた高度人材の育成と産学協働

次世代を牽引する高度人材の育成を目指し、幅広い視野と統合知を持つ研究者を輩出します。さらに、産業界を社会課題解決とイノベーション創出の強力なパートナーと位置づけ、持続可能な未来に向けた産学連携と共創を推進します。

多様性 DEIB を推進する

性別や国籍、年齢等に関わらず、異なる視点や経験、価値観を持つ多様な人々が集う環境を大切にし、学びと研究を活性化させます。ジェンダー平等を目指し、男女共同参画の取り組みを推進します。

DEIB…ダイバーシティ・エクイティ・インクルージョン・ビロنگング



鈴木 基史

大学院工学研究科長・工学部長
(マイクロエンジニアリング専攻 教授)

2 京大工学の新しい動き

京都大学工学部・工学研究科では、教育研究の発展に資する独自の施策を積極的に実施するとともに、日々革新的な研究が行われています。その一部を紹介します。

北川進理事・副学長、高等研究院特別教授 ノーベル化学賞受賞

本学理事・副学長・高等研究院特別教授 北川 進 先生が、令和7年10月8日、ノーベル化学賞を受賞されました。北川先生は本学工学部を卒業後、大学院工学研究科修士課程を経て、大学院工学研究科博士後期課程を修了され、昭和54年に京都大学工学博士の学位を授与されました。その後、近畿大学理工学部助教授、東京都立大学理学部教授を経て、平成10年6月に本学工学研究科教授に着任され、平成29年3月まで工学研究科・工学部において、多くの学生の教育と研究者の指導にあたり、人材を育成されました。平成19年10月からは京都大学物質—細胞統合システム拠点教授となられ、平成29年4月から現在まで、京都大学高等研究院特別教授として研究に取り組まれながら、令和6年4月からは京都大学理事・副学長を務められ、大学運営にも貢献されています。

北川先生は、世界に先駆けて多孔性配位高分子 (Porous Coordination Polymer, PCP) の概念を提唱し、その合成に成功されました。PCPは金属イオンと有機配位子から構築される結晶性多孔体であり、国際的にはMetal-Organic Framework (MOF) として広く知られています。北川先生による「PCP」という呼称は、この分野を切り拓いた独創的業績を象徴するものです。これらの材料は、気体分子の可逆的な吸着・分離・貯蔵を可能とし、触媒、分離膜、エネルギー貯蔵など多様な応用展開が期待されています。

この偉大な功績をなされた北川先生を誇りに、工学研究科・工学部において今まで以上に高度な教育研究を推進していきます。



北川 進 理事・副学長、高等研究院特別教授



記者会見の様子

桂図書館を起点としたテクノサイエンスヒル桂構想の実現

工学研究科では、桂図書館、総合研究推進本部と連携し、テクノサイエンスヒル桂構想の実現に向けて取り組んでいます。

令和7年度は、産学界との直接的なコミュニケーションを通じて連携アクションのきっかけを作る新たな試みとして、研究者に「気づき」と共に産業界との距離感短縮を図るためのネットワークイベント「産学共創で描くレジリエントな社会」をグラングリーン大阪 JAM BASE で開催しました。当日は JAM BASE のツアー後に、本学の研究者とスタートアップや研究シーズとの連携に関心が高い企業が「レジリエント / 災害対策」に関するテーマで研究発表及びワークショップを行いました。

また、桂キャンパスでの産学連携ネットワークイベントとして、CO₂を回収・濃縮しカーボンリサイクル技術により再資源化・利活用する炭素循環について共創する「CO₂ Xcycle 桂」を開催しました。工学研究科次世代学際院(iRING)の先生方と連携し、持続可能な未来への鍵となる『炭素循環』をテーマに、炭素循環社会の実現を加速する革新的技術を有する研究者に講演いただきました。

桂の庭
京都大学桂図書館
研究シーズ・カタログ



「京都大学大学院工学研究科・KSI II イベント：産学共創で描くレジリエントな社会」



「京都大学 次世代研究者産学連携ネットワークイベント：CO₂ Xcycle 桂」



「産学共創で描くレジリエントな社会」研究発表の様子



同イベント ワークショップ(ディスカッション)の様子

学部教育のさらなる向上

工学部独自のFD (Faculty Development) 活動として、工学部教育シンポジウムを毎年開催しています。令和7年度は、「教えるために学ぶ工学教育」をテーマとし、大学教育が現代において直面する喫緊の課題である「研究公正教育について」、「リーダーシップ教育について」というテーマで情報交換、討論を行いました。



シンポジウムのパネルディスカッションの様子

工学部を目指す受験生への魅力発信

令和7年12月には京都大学桂キャンパス座談会・見学会を行い、60名を超える高校生が桂キャンパスを訪れ、卒業生からの進路選択や現在の仕事の様子を聞いたあと、グループに分かれて研究室や桂図書館を見学しました。また引率の進路指導等を行う高校の教員と工学部長をはじめとする執行部の教員との座談会も開催し、特色入試の実施方法、女子学生の進学・進路、高校でのAIの活用方法などについて活発な意見交換が行われました。

また工学部では令和8年度から、特色入試に女性募集枠を導入し、第1期生が入学しました。誰もがより快適に過ごせるキャンパスの実現を目指して、令和6年度及び7年度にかけて、吉田キャンパス構内の総合研究9号館、工学部物理系校舎及び工学部総合校舎のトイレの全面改修を行いました。加えて、令和7年10月から、桂キャンパス構内及び吉田キャンパス構内(工学部物理系校舎ほか)の使用頻度の高い女子トイレに生理用品及び自動開閉式サニタリーボックスを設置しました。



桂キャンパス見学会の様子

次世代研究者の育成支援

工学研究科次世代学際院(iRING)では、若手研究者らによる専攻・系の枠を超えた学術交流の場を設けるなど、総合知を備えた次世代の研究者の育成を支援しています。設立3年目を迎え、令和7年度は所属研究者らによる共著論文が学術雑誌に掲載されたほか、2件の学際共同研究がスタートするなど、活動の成果が形になって表れ始めています。

令和7年度は、iRING内のグループによるセミナーの企画・開催と、他部局・産業界との連携の2つを柱に活動を行いました。グループ企画のセミナーは「学際研究とは何か」「研究の武器を共有しようの会」の2件で、前者では招待講師による「異分野交流」をテーマにした講演の後、学際研究を推進する中で生じる疑問点などについて参加者らが活発な討論を行いました。また後者では、研究者が各自研究で用いている手法、実験器具、ソフトウェアなどに焦点を当てたポスター発表を行い、産業界からの参加者も加わって、新たな手法やツールを学ぶきっかけとしました。どちらも専門分野を問わず課題を共有しやすいテーマであり、これらのセミナーを通して研究者間の協働への気運が一層高まったようです。他部局・産業界との連携としては、昨年度に続き経営管理大学院とイベント「スタートアップ創出連携」を共催したほか、総合研究推進本部の対談シリーズ「文理の森」において人と社会の未来研究院との連携企画を実施しました。また、テクノサイエンスヒル桂構想の一環である産学連携ネットワークイベント「産学共創で描くレジリエントな社会」「CO₂ Xcycle 桂」にiRINGの研究者が登壇し、後者のイベントには企画段階から加わるなど他のイベントとの連携も深めています。今後も、超学際を視野に支援を続けてまいります。



経営管理大学院共催イベントにおけるポスター発表

工学研究科次世代学際院
Web サイト



国際交流活動

工学部・工学研究科では、学生交流協定を締結している海外の大学の教員や学生を数多く受け入れています。附属工学基盤教育研究センターを中心として、海外の大学生に京都大学、京都、そして日本について幅広く学んでもらう機会を提供すると共に、本学学生には多文化共生の精神と国際感覚の涵養を促すために、講義や文化イベントを通じて交流を進めています。

令和7年度はフロリダ大学(UF)一行の受入れ回数を年2回へと拡大し、滞在期間も延長しました。第1回は5月12日から7月31日の間、教員2名、TA2名、学生38名、第2回は9月22日から12月10日の間、教員2名、TA1名、学生28名を受け入れました。

特に、第1回の受入れにおいては、数名のUF学生が複数の工学の研究室に所属し、ゼミへの参加や研究活動に従事するなど、将来の京都大学への留学も見据えた多角的な交流事業を実施しました。引き続き、工学研究科・工学部における国際化教育のより一層の強化を図ります。



ランチネットワークキングにおける交流の様子

工学広報 No.85
「工学における国際交流の推進」



ネーミングライツ事業の実施

本学では令和6年度より、施設等の運営、維持管理等に要する費用の一部に充てることを目的として、ネーミングライツ事業を実施しています。

このたび、本学は桂図書館2階のオープンラボ及びリサーチcommonsについて、令和8年4月から令和11年3月までの契約期間で、株式会社イシダとネーミングライツに関する契約を締結しました。これに伴い、オープンラボの愛称はイシダオープンラボ、リサーチcommonsの愛称はイシダリサーチcommonsとなります。引き続き、本事業を活用しながら、教育研究環境のさらなる向上を目指していきます。



イシダオープンラボ

電気系 2 専攻の統合による電気電子デジタル理工学専攻 設置

電気工学専攻、電子工学専攻は、令和 8 年度に統合し、電気電子デジタル理工学専攻となりました。

デジタル分野をけん引する高度人材の育成は、喫緊の課題となっており、材料・デバイス・量子・グリーンテクノロジー等の現実世界の課題の研究・開発の現場で、データサイエンス等の情報世界における最先端技術の適用を実践し、両方の世界を相乗的に発展させて行くことのできる知識・経験とリーダーシップをもつ多角の人材が必要です。電気系 2 専攻の 1 専攻化に伴い、既存の専攻からデジタル・グリーンに強く関わる研究室を抽出し、さらにデジタル・グリーンを対象とする研究室を増設して新領域「デジタル・グリーン領域」を設置しました。「デジタル・グリーン領域」は、電気・電子・情報の融合アプローチを通じ、データ、グリーン、AI 等に関する情報科学を、電気電子工学の物理に基礎を置きつつ基礎理論から応用まで深く学び、またそれらを構築・発展させることを目指す領域です。本領域では、電気電子工学の物理を応用した情報科学、また、電気電子工学を発展させるための情報科学応用の 2 つの側面を支える幅広い学術分野を多面的かつ広い視野から理解するための教育・研究を行い、電気・電子・情報が融合した新たな学際領域を開拓し、その展開によるフレキシブルな創造性を有する工学技術を構築できる人材を養成します。また、新専攻の他領域（「電気・システム・生体工学領域」、「光・電子・量子領域」）の学生についても、「デジタル・グリーン領域」の新設科目の受講機会や、領域交差型インターンによって「デジタル・グリーン領域」での研究にかかわる機会が与えられています。このように専攻全体で、現実空間と仮想空間と結び付けた新しい価値を創生可能な多角の人材の育成を目指します。



電気電子デジタル理工学専攻について（概要）

工学広報 No.84
工学研究科電気系 2 専攻の統合による電気電子デジタル理工学専攻と、化学系 6 専攻の統合による化学理工学専攻を設置（令和 8 年度）



化学系 6 専攻の統合による化学理工学専攻 設置

材料化学専攻、物質エネルギー化学専攻、分子工学専攻、高分子化学専攻、合成・生物化学専攻、化学工学専攻は、令和 8 年度に統合し、化学理工学専攻となりました。人類を取り巻く環境の変化が加速しており、工学研究科の化学系では変化する社会要請に応じて課題に対処できる研究者、技術者の育成が急務となっています。また、化学系研究者、技術者は、化学産業に留まらず、エネルギー産業、鉄鋼、金属産業、自動車産業、重機械工業、電機産業、さらに医療機器・製薬業界等からも需要があり、修士生には先端知識と深い専門性と同時に学際的な知識と知恵を持った高度専門人材であることが求められています。これらの社会的要請に応えるため、化学系 6 専攻を 1 専攻に改組し、広範な体系からなる講義、演習科目を提供するとともに、オンザリサーチトレーニングによる実践的な研究開発能力を学生に教授できる機動的な研究組織となります。これまで化学系 6 専攻では各専攻において個別の専門知と限定的な学際知を教授してきましたが、化学理工学専攻では、基盤的な教育組織において専門知を体系的に深化させ、機動的な研究組織において分野横断的な学際知を涵養します。教育組織は基幹学問を 6 トラック（物理・量子化学トラック、有機化学トラック、無機・分析化学トラック、高分子化学トラック、生物化学トラック、化学工学トラック）に再編し、研究組織は変化する社会要請に応じて継続的に更新する機動的な組織として先端 4 領域（材料・分子システム化学領域、生医工化学領域、実装化学領域、環境・エネルギー化学領域）を編成し、世界で戦える高度専門人材を育成します。



化学理工学専攻について（概要）

工学広報 No.84
工学研究科電気系 2 専攻の統合による電気電子デジタル理工学専攻と、化学系 6 専攻の統合による化学理工学専攻を設置（令和 8 年度）



電気系・化学系新専攻の設置記念式典を実施しました

工学研究科では、電気電子デジタル理工学専攻、化学理工学専攻の設置を記念し、令和 8 年 4 月 16 日に桂キャンパス 船井哲良記念講堂において、電気電子デジタル理工学専攻 及び 化学理工学専攻 設置記念式典を開催し、来賓・教職員・学生など約 100 名が参加しました。



電気電子デジタル理工学専攻の集合写真



化学理工学専攻の集合写真

「光子のふしぎと光量子センシング」を大阪・関西万博に出展

令和 7 年 8 月 14 日から 20 日の 7 日間、大阪・関西万博の EXPO メッセ「WASSE」を会場として開催された内閣府・文部科学省主催の展示会「エンタングル・モーメント」に、工学研究科を中心とした京都大学万博量子展示チームは、「光子のふしぎと光量子センシング」と題して出展しました。「量子もつれ」の不思議な世界を、実際に量子もつれ光子対を利用したその場で実際に動作している装置により体験できる世界的にも極めて稀な展示を行いました。また、島津製作所や santec Holdings などの協力を得て、従来の技術の限界を超える量子もつれ光を用いた「光量子センシング」技術とその社会への波及についても紹介しました。量子もつれの実験は、本来、温度・湿度・振動が厳密に管理された実験室環境で行われます。万博会場のような一般展示空間で実験を成立させることは大きな挑戦でしたが、約 3 万人の来場者に体験いただくことができました。今回の展示を通じ、研究者の想いやビジョンを、一般の方々や異分野の方々と共有する場として、科学展示が果たす役割の大きさを強く感じました。



「量子もつれの検証実験装置」を来場者に説明する竹内教授



会場で展示されたグラフィック



キャラクター「ミツコ」

京都大学万博量子展示
ホームページ
光子のふしぎと光量子
センシング



工学広報 No.85
「光子のふしぎと光量子
センシング」を大阪・関西
万博に出展しました



京都大学－清華大学環境技術共同研究・教育センター設立 20 周年

京都大学－清華大学環境技術共同研究・教育センターは、2005 年 10 月に、中国・深圳の清華大学のキャンパスに設立されました。2025 年は設立 20 周年を迎えることから、7 月 11 日～13 日に京都大学で、11 月 15 日に深圳の清華大学のキャンパスで 20 周年記念イベントを開催しました。地球環境問題の解決のためには、大学や諸機関との国際的な連携や、国際的に活躍できる人材育成が不可欠であり、この 20 年間で、それぞれ 200 人を超える教職員・学生が双方向で交流しています。2022 年からは修士のダブルディグリープログラム（3 年間で京都大学と清華大学の両方の修士を取得）も実施しています。両校の学生や研究者が国境を越えて学び合い、友情と信頼を築いてきた「人のつながり」こそが、真の国際協力の基盤であり、今後さらに重要性が増していくと考えます。この 20 周年の節目を新たな出発点とし、当センターはこれからも両大学の絆を一層深め、両大学の学生や若手研究者の国際人材化や研究能力の開発に努めてまいります。

2025 年京都大学－清華大学環境技術共同研究・教育センター設立 20 周年イベントを開催しました（2025.7.11～13）



深圳における京都大学－清華大学環境技術共同研究・教育センター設立 20 周年イベント開催報告（2025.11.15）



京都大学での 20 周年記念イベントでの集合写真



両大学の教職員・学生の大阪・関西万博視察



清華大学深圳国際研究生院での 20 周年記念イベントでの集合写真

材料工学専攻寄附講座「非鉄製錬学講座」の第 3 期更新

材料工学専攻非鉄製錬学講座は、三菱マテリアル株式会社の支援により 2017 年に開設された寄附講座で、今回、2030 年に向けて第 3 期の更新を行いました。一般に金属製錬では多様な元素が薄い濃度で混合した鉱物を対象に、分離操作を繰り返し高純度の製品に仕上げています。そこには先人たちの英知が結集しており驚くことの連続です。とはいえ、さらなる二酸化炭素排出抑制ならびに資源循環社会への期待から新しい知恵も求められています。また、素材産業はすべての産業の土台でありそこで活躍する人材の輩出やすでに就職した技術者の再教育も重要となっています。そこで非鉄製錬やそのリサイクルに関わる基礎研究、さらに人材教育を行うために、本講座が開設されました。「企業の垣根なく思うがままに活動してほしい」という寄附者の意向を受けて教育を中心とした講座運営を探究しています。最近では、資源循環に関心を持つ若者もたくさんおり喜びを感じることも多くなりました。講座運営にご助力いただいている皆さんに深く感謝するとともに本講座がさらに発展するよう努力していきます。



三菱マテリアル株式会社と京都大学工学研究科の関係者による集合写真



講義される宇田教授の様子

非鉄製錬学講座



材料工学専攻寄附講座
「非鉄製錬学講座」の第
3 期更新に係る記者会見
を行いました。

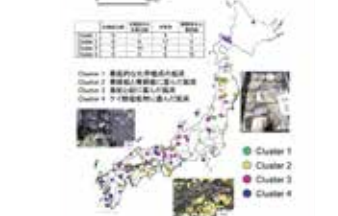


2025 年度の主な研究成果

工学部・工学研究科 Web サイトに掲載している研究成果やイベントの開催案内から抜粋した一部を紹介します。

都市社会工学専攻

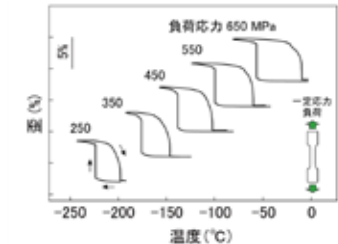
博物館収蔵の鉱石試料の分析により日本全体の熱水鉱床の生成要因を解明
—地球資源の生成メカニズム理解の深化に向けて—



本研究では、日本を網羅する 116 鉱山から収集され、京都大学総合博物館と秋田大学鉱業博物館に収蔵された 326 個の鉱石試料の鉱物組成と元素濃度分析を行い、得られたデータの変量解析によって、日本の熱水鉱床鉱石の化学的特徴とそれを作る要因を初めて体系的に明らかにしました。鉱床の形成年代とクラスターの関連は、鉱床のタイプ、形成年代、地殻変動環境、熱水起源として機能した貫入岩体を特定することにより、新たに発見される熱水鉱床の主要な金属元素の推定に寄与すると期待されます。

建築学専攻

−200℃の低温でも動作する アクチュエータ用の形状記憶合金を開発

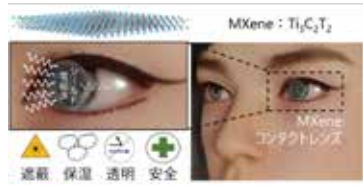


電気や熱を機械的エネルギーに変換するアクチュエータには、用途に応じてさまざまな機構や材料があります。特に、宇宙機器や水素利用などの分野では、−100℃以下の低温でも正確に動作し、高出力を発揮できるアクチュエータ用材料が求められています。しかし、これまで実用的な材料はありませんでした。本研究では、これまで建築構造材料として開発してきた、銅、アルミニウム、マンガンを主成分とする合金が−200℃でも形状記憶効果を示すことを発見し、さらに、この合金をアクチュエータとして組み込んだ温度制御用機械式ヒートスイッチが−170℃で動作することを確認しました。

マイクロエンジニアリング専攻

MXene を統合したコンタクトレンズの開発

眼を電磁波から保護し、眼ヘルスケアを革新する新たなブレイクスルー

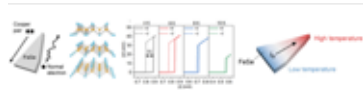


本研究では、MXeneと呼ばれる2次元ナノシート状の遷移金属化合物を市販のソフトコンタクトレンズに安定的に統合する技術を開発しました。

MXeneは優れた導電性と電磁波吸収・反射特性を有するため、コンタクトレンズ表面にコーティングすることで、電磁波からの眼の保護とレンズ自体の高い光透過性を同時に実現します。今回の技術では、MXeneの酸化劣化を防ぎながら、市販のコンタクトレンズ上に簡便かつ強固に貼り付ける方法を確立しました。

電子工学専攻 現：電気電子デジタル理工学専攻

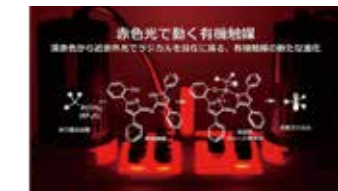
超伝導ダイオード効果の新しい背景学理を発見 —超省電力な情報回路の実現に大きく前進—



超伝導ダイオード効果は超伝導体に電流を流す際に、電流を流す方向によって抵抗がゼロの超伝導状態になったり抵抗が有限の常伝導状態になったりする効果を言います。FeSe（セレン化鉄）という超伝導体を用いて超伝導ダイオード効果の研究を行う中で、物質の持つ熱電効果とそれに伴う素子内部の熱勾配が超伝導ダイオード効果をもたらすことを発見し、従来この効果の発現に必要なとされてきた明示的な空間反転対称性の破れも外部磁場も不要であることを明らかにしました。

材料化学専攻 現：化学理工学専攻

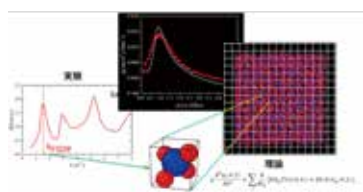
赤色光で動く有機触媒 —深赤色から近赤外光でラジカルを自在に操る、有機触媒の新たな進化—



本研究では、アザジピロメテン（Aza-dipyrromethene, ADP）という有機分子（触媒）がホウ素化合物と結合して形成する「光活性ボレート複合体」を設計し、この複合体が赤色光照射によって直接励起され、炭素-ホウ素結合を切断し炭素ラジカルを生成することを明らかにしました。従来の光触媒反応は高エネルギーの青色光に依存し、金属錯体を必要とする場合が多かったのに対し、本反応は金属を使わず、有機分子のみで低エネルギー光を駆動力とする新しい化学反応です。この「リガンド誘起直接励起触媒（Ligand-Induced Direct Excitation Catalysis）」の概念は、医薬品合成や光医療、環境調和型化学プロセスなどへの応用が期待されます。

ガラス基礎科学講座

ガラスの「見えない秩序」がテラヘルツ帯の揺らぎを決める



本研究では、代表的なガラスであるシリカガラス（二酸化ケイ素、SiO₂）とグリセロール（Glycerol、C₃H₈O₃）について、BPを定量的に解析しました。その結果、両ガラスに共通して、BPの発生には、「弾性不均一性の空間相関長」と「弾性率の変動の大きさ」という 2 つの因子が重要であることが分かりました。すなわち、ガラスの内部では、硬い領域と柔らかい領域が混在しています。この弾性のばらつきが、どの程度のスケールで変化しているか（空間相関長）が、BP の周波数を決める鍵であり、FSDP がナノメートルスケールの空間相関長と深く関係していることが分かりました。

各項目の二次元コードからそれぞれの研究成果等の詳細を工学 Web サイトにてご覧いただけます

3 寄附講座・産学共同講座

民間等からの寄附金等によって、本学の実験研究の進展及び充実を図ることを目的とし、本学の主体性が確保されるよう十分な配慮のもとに「寄附講座」または「産学共同講座」を設置し運営しています。



寄附講座

災害リスクマネジメント工学
(JR 西日本) 講座

寄附者 西日本旅客鉄道株式会社

設置専攻 社会基盤工学専攻

講座 Web サイト



非鉄製錬学講座

寄附者 三菱マテリアル株式会社

設置専攻 材料工学専攻

講座 Web サイト



優しい地球環境を実現する
先端電気機器工学講座

寄附者 ニデック株式会社

設置専攻 電気電子デジタル理工学専攻

講座 Web サイト



ガラス基礎科学講座

寄附者 日本電気硝子株式会社

設置専攻 化学理工学専攻

講座 Web サイト



住友電工グループ社会貢献基金
「地球環境システム」講座

寄附者 公益財団法人住友電工グループ
社会貢献基金

設置専攻 都市環境工学専攻

講座 Web サイト



京都製作所次世代シンセシス科学人材育成講座
京都製作所次世代基礎力学人材育成講座

寄附者 株式会社京都製作所

設置専攻 機械理工学専攻、マイクロエンジニアリング専攻、航空宇宙工学専攻

講座 Web サイト



INPEX 脱炭素社会
実現エネルギー資源開発工学講座

寄附者 株式会社 INPEX

設置専攻 社会基盤工学専攻

講座 Web サイト



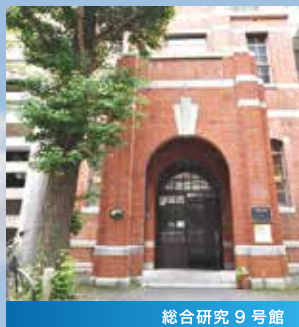
産学共同講座

- 進化型機械システム技術産学共同講座(三菱電機)
- 固体型電池システムデザイン産学共同講座
- 脱炭素工学研究講座
- 住友金属鉱山二酸化炭素有効利用産学共同講座
- 三井化学・京大デジタルケミカル産学共同研究講座
- 三菱重工 革新的燃焼ダイナミクス講座



4 沿革

1897(明治30)年6月18日、京都帝国大学が創立され、理工科大学(理学部と工学部の前身)として京都大学はスタートしました。
その意味では京都大学の歴史は工学部の歴史でもあります。学科・専攻の変遷を中心に、京大工学の今と昔を振り返ります。



総合研究 9 号館



工学部物理系校舎



総合研究 15 号館 (旧建築学教室本館)



桂キャンパス A クラスター



桂キャンパス C クラスター

沿革

京都帝国大学創設

理工科大学開設

1900

1947 年
京都帝国大学が京都大学と改称

1949 年
新制京都大学設置

大学院重点化完了

2000

桂キャンパス開学

2020 年
桂図書館開館

1897 年
1898 年

電気工学科／採鉱冶金学科／製造化学科設置
土木工学科／機械工学科設置

1914 年

理工科大学を理科大学と工科大学に分離、土木／機械／電気／採鉱冶金／工業化学科設置

1919 年
1920 年

建築学科設置
工科大学は工学部となる

1939 年
1940 年

燃料化学科設置
化学機械学科設置

1941 年
1942 年

繊維化学科設置
採鉱冶金学科を鉱山学科と冶金学科に分離、航空工学科設置

1946 年

航空工学科廃止、応用物理学科設置

1953 年
1954 年

電子工学科設置
大学院工学研究科設置

1955 年
1957 年

応用物理学科を航空工学科に改称
原子核工学専攻設置

1958 年
1959 年

原子核工学科／衛生工学科設置
数理工学科設置

1960 年
1961 年

精密工学科／合成化学科設置
電気工学第二学科・金属加工工学科設置、繊維化学科を高分子化学科、化学機械学科を化学工学科に改組／改称

1962 年
1963 年

機械工学第二学科設置
交通土木工学科設置

1964 年
1966 年

燃料化学科を石油化学科に改組／改称
建築学第二学科設置、鉱山学科を資源工学科に改称

1970 年

情報工学科設置

1975 年

機械工学第二学科を物理工学科に改組／改称

1983 年

分子工学専攻設置

1987 年

応用システム科学専攻設置

1991 年

環境地球工学専攻設置

1993 年
1994 年

化学系の改組

1995 年
1996 年

地球系／建築系の改組
電気系の改組、数理工学科／情報工学科を情報学科に改組

2003 年
2004 年

地球系／建築系の改組、電気系の名称変更、
電気系化学系が A クラスターへ移転

2005 年
2006 年

物理系の改組
建築系が C クラスターへ移転

2013 年

物理系が C クラスターへ移転

2024 年
2026 年

工業化学科を理工化学科へ名称変更
電気系／化学系の改組

桂キャンパスから見える京都市街の景色

地球系

工学部 | 地球工学科
工学研究科 | 社会基盤工学専攻 / 都市社会工学専攻 / 都市環境工学専攻

建築系

工学部 | 建築学科
工学研究科 | 建築学専攻

物理系

工学部 | 物理工学科
工学研究科 | 機械理工学専攻 / マイクロエンジニアリング専攻
航空宇宙工学専攻 / 原子核工学専攻 / 材料工学専攻

電気系

工学部 | 電気電子工学科
工学研究科 | 電気電子デジタル理工学専攻

化学系

工学部 | 理工化学科
工学研究科 | 化学理工学専攻

工学部 | 情報学科

■ 工学と関連のある研究科等の設置

1996 年 エネルギー科学研究科
1998 年 情報学研究科
2002 年 地球環境学舎・学舎

■ 工学研究科が輩出したノーベル賞受賞者

1981 年 化学賞 福井謙一 (名誉教授)
2001 年 化学賞 野依良治 (卒業生)
2019 年 化学賞 吉野 彰 (卒業生)
2025 年 化学賞 北川 進 (高等研究院特別教授)

詳細な年表はこちら



5 組織



鈴木工学研究科長、副研究科長、研究科長補佐、桂地区（工学研究科）事務部部課長一同

● 桂地区（工学研究科）事務部

総務課	管理課	経理課	教務課	学術協力課
総務掛 企画広報掛 人事掛 学術支援掛 利用支援掛 Aクラスター事務区庶務掛 Cクラスター事務区庶務掛	財務企画掛 財務分析・評価掛 環境管理掛 施設管理掛	契約掛 運営費・寄附金掛 旅費・謝金掛	教務掛 大学院掛 留学生掛 Aクラスター事務区教務掛 Cクラスター事務区教務掛	研究・国際支援掛 産学交流掛 産学連携掛 補助金掛 研究施設支援掛

● 工学研究科技術室

（令和8年4月1日現在）

工学部	学科長	大学院工学研究科	専攻長
地球工学科	宇野 伸宏	社会基盤工学専攻	村田 澄彦
		都市社会工学専攻	市川 温
		都市環境工学専攻	島田 洋子
建築学科	谷 昌典	建築学専攻	小椋 大輔
物理工学科	横峯 健彦	機械理工学専攻	平方 寛之
		マイクロエンジニアリング専攻	横川 隆司
		航空宇宙工学専攻	高田 滋
		原子核工学専攻	斉藤 学
		材料工学専攻	深見 一弘
電気電子工学科	佐藤 高史	電気電子デジタル理工学専攻	竹内 繁樹
情報学科	谷口 忠大		
理工化学科	河瀬 元明	化学理工学専攻	松田 建児

（令和8年4月1日現在）

附属教育研究施設等	センター長
附属光・電子理工学教育研究センター	DE ZOYSA, Menaka
附属流域圏総合環境質研究センター	伊藤 禎彦
附属量子理工学教育研究センター	斉藤 学
附属桂インテックセンター	安部 武志
附属情報センター	阪本 卓也
附属環境安全衛生センター	大北 英生
附属工学基盤教育研究センター	聲高 裕治
附属学術研究支援センター	安部 武志
工学研究科次世代学際院	平山 朋子
附属光量子センシング教育研究センター	竹内 繁樹

（令和8年4月1日現在）



桂キャンパス銘板

[詳しくはこちら](#)



6 工学部の学科

地球工学科

地球の合理的な開発・保全

地球工学は、我々の生活と先端技術を支える資源・エネルギー、持続的に社会を支えるインフラの発展、そして人類が自然と共生するために必要な環境の維持など、諸技術体系とその融合分野で構成されます。多岐にわたる科学技術を総合的に理解する見識を養う教育をめざし、「Think Globally and Act Locally」を理念に掲げ、地球全体の合理的な開発・保全と人類の持続可能な発展を支える高度な研究や実務を遂行できる能力を養っています。国際的技術者の育成に必要な、すべての講義が英語で行われる「国際コース」も設置されています。



詳しくはこちら



建築学科

ヒューマンな技術を学ぶ

人間の生活環境を構成する建築は、安全で健康にして快適な生活を発展させる基盤であり、多様な技術を総合して創造されます。建築は人間生活のあらゆる面に深く密接にかかわるヒューマンな技術といえます。建築学科では、自然科学だけでなく、人文・社会科学や芸術に深い関心をもつ学生もひとしく歓迎し、その才能を伸ばす教育を行います。卒業後の進路も、建築家、建築技術者、建築行政担当者、大学や企業の研究者、コンサルタント、プランナーなど、実に多様です。



詳しくはこちら



物理工学科

新技術の創造人材の養成

21 世紀を起点とする次代に向けて、物理工学分野には新たなシステムや材料、エネルギー源の開発などに加え、宇宙空間の利用といった課題解決への期待が寄せられています。こうしたニーズに応える新技術を創造するには、基礎的学問を十二分に修得する必要があるという観点から「物理工学科」では、基礎重視の教育・研究を進めています。さらに機械システム学、材料科学、エネルギー応用工学、原子核工学、宇宙基礎工学の 5 コースが連携し、高い専門的能力と広い視野を持つ人材を育成します。



詳しくはこちら



電気電子工学科

産業や生活基盤を支える科学技術

電気電子工学は、現代社会のあらゆる産業や社会インフラに不可欠な科学技術を支えるだけでなく、21 世紀を豊かにするための重要な役割を担っています。そのため電気電子工学科では、幅広い領域におよぶ総合的な知識と高い専門性に加え、複眼的な視野や卓越した独創性、倫理観を備えた人材の育成をめざしています。カリキュラムは基礎学習のあと、各自が志望にあわせて専門科目を履修します。こうした4年の学びを通して最先端の科学技術を理解しながら、電気電子工学の発展が担える知識と技術を身につけます。



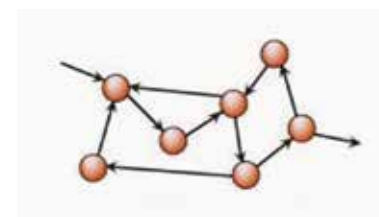
詳しくはこちら



情報学科

複雑なシステムの問題を解決

社会の高度情報化にともない、多様な分野に現れる数理モデルの解析や、複雑な情報システムを通じて収集される膨大なビッグデータの分析や活用が必要とされています。そのためにはシステムの機能はもとより、そこに流れる「情報」の本質を究明し、それに基づいて効率的なデザインを行うための思考力が重要になってきます。「情報学科」では、実世界に現れる複雑なシステムの諸問題を数理的アプローチにより解決するとともに、計算機のハードウェア、システム・ソフトウェア、情報システムを設計・活用できる人材となることをめざして学びます。



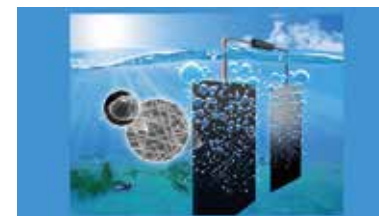
詳しくはこちら



理工化学科

最先端科学技術の基盤を担う

化学は、さまざまな物質をつくる反応とそのプロセス、物質がもつ機能や物性を対象とする学問です。「理工化学科」は、持続可能な社会を作り出すために、地球・宇宙規模の課題に対応できる、創造的な基礎科学・先端技術の開発や学際領域の研究を推進しています。化学に関連した広い分野にわたる基礎科学と工学を重視した教育を行い、物質そのものや物質の持つさまざまな機能の創出、エネルギーの利活用、生命・生物システムの理解と応用など、社会を支える多様な化学分野で活躍できる科学者・研究者ならびに技術者を育成します。



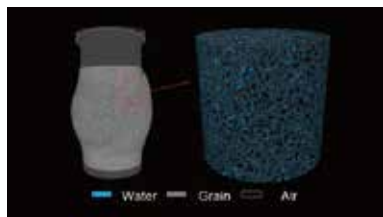
詳しくはこちら



7 工学研究科の専攻

社会基盤工学専攻

新たな産業と文明を開き、環境と調和して、安全・安心で活力ある持続可能な社会を創造するためには、人類が活動する領域とそこにある社会基盤構築物を対象とした技術革新が欠かせません。社会基盤工学専攻では最先端技術の開発、安全・安心で環境と調和した潤いのある社会基盤整備の実現、地下資源の持続的な利用に重点を置き、社会基盤整備を支援する科学技術の発展に貢献します。そのために、地球規模の環境問題とエネルギー問題を深く理解し、国際的かつ多角的な視野から新たな技術を開拓する工学基礎力、さらに実社会の問題を解決する応用力を有する人材を育成します。



詳しくはこちら



都市社会工学専攻

都市社会工学専攻は、高度で豊かな生活の質を保証しうる都市社会システムの実現を目指して、高度情報通信技術、社会基盤技術、エネルギー基盤技術の融合を図るために、都市工学・交通工学・ロジスティクス工学・地球資源工学などの都市活動を分析する技術や、都市計画・交通計画などの計画技術、安全で持続可能な都市システムを実現するためのライフライン、地盤、河川などに関わる社会基盤を高度化する技術、都市ガバナンス及び都市基盤マネジメントという概念の下での新たな都市エネルギー資源論を構築するための技術、さらには持続可能性評価を含めた都市システムの総合的なマネジメントを行うための方法論や技術の確立を目指しています。

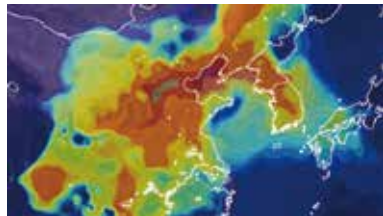


詳しくはこちら



都市環境工学専攻

気候変動等の地球環境問題に代表されるように、科学の進歩がもたらした人類の発展はいまや地球規模での限界に直面しています。また、地球上には、高齢化・価値観の多様化に困惑する社会が存在する一方で、人口爆発や人間安全保障の未充足に苦しむ社会が依然存在します。都市環境工学専攻は、これらの問題解決の要請に応えるべく、学内外の関連機関・部局・専攻とも連携し、個別の生活空間から地域及び地球規模に至る幅広い環境場を対象として、顕在化／潜在化する地域環境問題の解決、健康を支援する環境の確保、持続可能な地球環境・地域環境の創成、新しい環境科学の構築を念頭に教育・研究を推進します。



詳しくはこちら



建築学専攻

建築学は人類の生活に関与する多様な学術分野を担っており、地球環境の持続的な発展と文化の創造に対して大きな責任を負っています。高度な機能を有し、安全・安心を維持し、文化創造を推進するための多様な建築空間を実現するため、建築学における計画・構造・環境の各分野の基礎的部門の教育と先端的研究を推進するとともに、建築を自然環境と生活環境のなかで総合的・実践的に捉え直し、既成の専門分野にとらわれずに分野横断的で幅広い専門的知識と創造性を修得させる教育・研究を行っています。



詳しくはこちら



機械理工学専攻

機械工学では、マイクロからマクロにわたる広範な物理系をその対象として、生産システム、エネルギー、環境、生活、生命・生体・医療などに関する人間のための技術の進展を図ります。その基礎となる学問は、材料・熱・流体の力学と物性物理、機械力学、振動工学、制御工学などであり、さらにその基礎には、機械システムとそのエレメントの設計・製造・評価・診断・制御に関する工学の考え方が求められます。機械理工学専攻では、人間と自然との共生を目指す広い視野をもって、これらの智恵や知識を主題とする研究・教育を行い、また、挑戦的に課題を設定しそれを克服する能力をもってリーダーとなりうる技術者・研究者を育成し、社会と産業界の期待に応えるべく努めています。

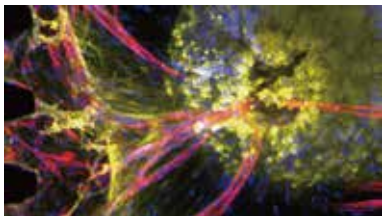


詳しくはこちら



マイクロエンジニアリング専攻

マイクロエンジニアリング専攻は、21 世紀の人間社会・生活に大きな変革をもたらす原動力として期待されている微小な機械の研究能力と開発能力を有する研究者・技術者を養成する教育・研究課程です。機械工学の基本知識をベースに、ナノメートルオーダーからマイクロメートルオーダーの微小領域特有の現象を解明し、ナノレベルで発現する量子効果の利用に必要な量子工学、材料を創製し加工するための微小領域における材料工学・微細加工学、ナノ・マイクロシステムを構築し思い通りに動かすためのシステム工学・制御工学、そして、最も精密な微小機械の集合である生体に学び、生体の機能解明や分子・細胞を応用することを目的としたバイオエンジニアリングに必要な学問分野を有します。

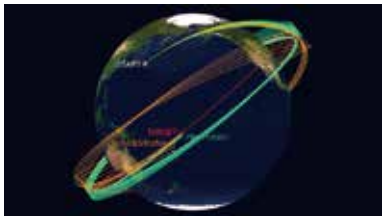


詳しくはこちら



航空宇宙工学専攻

航空宇宙工学専攻では大別して、航空宇宙機の航行に関わる航空宇宙環境との相互作用、航空宇宙機の推進とエネルギー、航空宇宙機の材料・構造強度、航空宇宙機のシステム・制御などを研究対象としています。航空宇宙工学というフロンティアを切り開くため、当専攻では基礎的な科学と工学を最重要視しています。いいかえると、第一の使命は単に航空宇宙に限定されず新しい可能性に向けた先端工学の扉を開くこと、第二の使命は深い知識に基づいてオリジナルなアイデアを十分に創造できる科学技術者を育てることです。



詳しくはこちら



原子核工学専攻

原子核工学専攻は、素粒子、原子核、原子や分子など、量子の科学に立脚したミクロな観点から、量子ビーム、ナノテクノロジー、アトムテクノロジーなど、最先端科学を切り開く量子テクノロジーを追求するとともに、物質、エネルギー、生命、環境などへの工学的応用を展開して、循環型システムの構築を目指しています。そして、体系的かつ立体的な教育・研究を通じて、先端的研究者や高度専門技術者などの人材を育成しています。このような研究・教育によって、人間社会のより豊かで持続ある発展に貢献しています。



詳しくはこちら



8 附属教育研究施設等

附属光・電子理工学教育研究センター

光・電子・量子の自在な制御を可能とする最先端技術の創成・社会実装拠点の構築、ならびに新学術創成に向けた先進教育研究拠点形成を目指して活動しています。

本センターの目的は、光・電子・量子の自在な制御を可能とする最先端技術の創出・社会実装を行う拠点の形成と、新学術創成を目指す先進教育・研究拠点の構築を行うことにあります。21 世紀は、光・電子・量子の時代と言われています。世界規模で情報処理量とエネルギー消費が継続的に増大する中で、将来にわたって世界が持続的に発展するためには、現実空間と仮想空間を高度に融合した超スマート社会（Society 5.0）の実現や、実質的な二酸化炭素排出量をゼロとするカーボンニュートラルの達成が不可欠です。そのためには、自動運転（スマートモビリティ）、スマート製造、量子演算、さらには、エネルギーの有効活用が不可欠で、その核となる光・電子・量子を自在に操るための技術革新が極めて重要といえます。本センターでは、深い物理的思考に基づく教育研究背景をもつメンバーと、社会実装を願う産業界のメンバー等を結集し、京都大学が世界に誇る「フォトニック結晶」「フォトニックナノ構造」「ワイドバンドギャップ材料」技術等を駆使して、光・電子・量子の自在な制御を可能とする最先端技術の創出および社会実装拠点形成を進めています。また、本センターは、「先端光・電子デバイス創成学」卓越大学院教育の一端をも担っており、情報学研究科や、理学研究科等とも連携しながら、光・電子・量子分野における新学術創成を目指す先進教育研究拠点の構築を進めています。



詳しくはこちら

附属流域圏総合環境質研究センター

有害物質を制御・評価・緩和することで環境質を向上させることを目指します

環境の質に焦点を置いて、制御、評価、緩和の3領域の有機的な連携の下に環境汚染物質による人間及び生態系への有害影響に関する工学的研究の総合化と教育機能の拡充を目指しています。外国からの招聘教授の制度を有していることも特徴です。人間や生態系に直接影響のある問題に対する世界的な関心が高まり、環境状態のわずかな変化が蓄積的・累積的に及ぼす影響の重大性が認識される現状から見て、当研究センターでの成果は大いに期待されています。



詳しくはこちら

附属量子理工学教育研究センター

粒子線加速器を活用したナノスケール科学の研究と支援を行います

当センターでは、粒子加速器を用いたイオンビーム、電子線、X 線などの高機能な量子線を活用し、原子レベルでの現象観測や新材料・デバイスの開発を推進しています。これにより、物質科学、医学、エネルギー、環境、宇宙科学などの幅広い分野への貢献を目指しています。また、学内外の研究者が利用できる共同利用施設として、イオンビーム分析や材料照射を通じた最先端の研究・教育支援を積極的に行っています。さらに、併設する核燃料施設では、核燃料サイクル技術の基礎研究にも取り組んでいます。最先端の加速器技術を駆使し、未来を拓く研究を支援します。



詳しくはこちら

附属桂インテックセンター

専門分野の枠組みを越え英知を結集融合することにより、工学基盤技術の革新と世界を先導する新技術の発明・創出を目指します

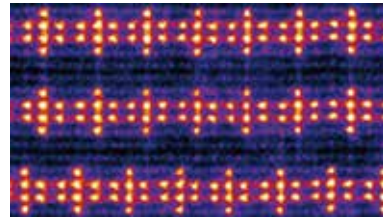
専攻、研究科の枠組みを越えた研究者群で組織された複数の研究部門が設置され、最先端の戦略的研究を行うとともに、世界を視野に入れた対外的な顔として成果を大いに期待され、研究交流等も行っています。また、地上3階地下1階のこの建物には、さまざまなプロジェクトグループも入居しており、日々新たな工学の可能性を探究しています。



詳しくはこちら

材料工学専攻

材料科学・材料工学は、未だ世にない新しい物を創るために必要な新たな材料（特に結晶性のハードマター）を創造する学問・技術です。そのままだと錆びてしまいぼろぼろになる鉄から、錆びにくいステンレス鋼をはじめとする様々な優れた特性を有する特殊鋼が創りだされ、世の中の機械・建築構造物の設計は大幅に変更されるに至りました。これまでの歴史が示しているように、新材料の開発は革新技術の発展においてパラダイムシフトを引き起こします。材料工学専攻では、構造材料、機能性材料の開発・実用化を目指した多岐にわたる基礎研究を推進しています。



詳しくはこちら

電気電子デジタル理工学専攻

近年、携帯情報機器や医療機器の加速度的進展、車の電動化と自動運転、量子コンピュータの実現、AI（人工知能）の進化など、目覚ましい革新が見られますが、これらはほぼ全て電気電子関連の学理と技術の進展によるものと言って過言ではありません。電気工学専攻と電子工学専攻は令和 8 年度より「電気電子デジタル理工学専攻」に一専攻化し、「デジタル・グリーン領域」（新設）、「電気・システム・生体工学領域」、「光・電子・量子領域」を設けました。本専攻では先端的な電気・電子・情報分野の学際融合的な研究と教育を通じて、物理・数理に根ざしつつも情報技術を活用でき、高度情報化社会を牽引しながらエネルギー・環境問題の解決にも貢献できる人材育成を行います。



詳しくはこちら

化学理工学専攻

化学理工学専攻は、従来の化学系 6 専攻が一つの専攻に集約・改組される形で、令和 8 年度から新たに設置されました。近年、化学に付託される社会的要請は著しい広がりを見せ、その変化も加速していることから、従来の細分化された教育研究体制から、社会の要請に柔軟かつ臨機応変に対応可能な研究教育体制へと変革すべく、この化学理工学専攻が生まれました。学問としての化学は、その学際性が最大の特徴です。複数の学問領域にまたがる、あるいはどの学問領域にも分類されない新しい研究分野が次々と生まれています。本専攻の名称である「化学理工学」には、特定の学問領域に限定されず化学全体を包括すること、そして「化学の基礎学理をもって理工学の発展に貢献する」という趣旨が込められています。本専攻では「基礎化学に基づく創造的かつ学際的な研究を重視する学風」という伝統を堅持しつつも、「化学」という学問が社会から受ける要請の多様化と変化に素早く対応し、環境・エネルギー問題など地球規模の課題や、社会におけるさまざまな喫緊の課題に対処できる研究者・技術者を育成することを目指しています。大学院生に高度な専門知識・能力とともに広い分野の学際的な知識を修得させることを目的として、「トラック」と「研究領域・研究モジュール」から構成される研究教育体制を新たに設計し提供しています。



詳しくはこちら

附属情報センター

工学研究科の情報基盤の整備とその円滑な運用をサポートします

工学研究科附属情報センターは、工学研究科の情報基盤の運営を行う組織として設立されました。本センターでは、研究科の研究・教育・運営の支援として情報システムの構築・運用、情報セキュリティ管理および IT 環境の利用サポートを行っています。また全学のモデルケースとして最新技術の導入にも積極的に取り組み、学内サービスの向上に貢献しています。



詳しくはこちら



附属環境安全衛生センター

工学研究科で学び働く人々の快適環境をサポートします

工学研究科を環境にやさしく安全衛生に配慮した教育研究にふさわしい場にするを目的とし、労働安全衛生法等の安全衛生関係諸法令の遵守ならびに環境保護に向けた業務を一元的に行います。本センターでは作業管理、作業環境管理、健康管理について専門の教員・技術職員を配置し、作業環境測定や化学物質管理システムの運用などを通じて、工学研究科の教育研究活動をサポートします。



詳しくはこちら



附属工学基盤教育研究センター

工学教育の革新及び国際化教育の一層の強化を図ります

工学基盤教育研究センターは多様化する工学教育の現状に機能的かつ頑健に対応するため、工学研究科・工学部における工学教育の革新及び国際化教育のより一層の強化を図り、将来にわたって盤石たる工学の基盤教育を築くことをミッションとしています。若手教員の FD や工学部・工学研究科共通型科目を所掌する他、大学教育の国際化およびグローバル人材育成のために、EdTech の活用による留学生教育の高度化、学生および若手研究者の留学・海外派遣事業の推進、On-site Laboratory・ダブルディグリーを組み合わせた積極的かつ戦略的な国際連携開拓を進めていきます。さらに、社会との繋がりを意識し起業家精神を涵養するアントレプレナーシップ教育を、学部・大学院共通型科目として結実させ推進しています。



詳しくはこちら



附属学術研究支援センター

研究に関わる様々な業務を支援します

当センターは、文部科学省「リサーチ・アドミニストレーターを育成・確保するシステムの整備」事業の一環で、研究者の様々な研究活動を支援するために設置されました。研究者が行う、競争的資金の獲得、プロジェクトの管理、産官学連携の推進等を支援します。



詳しくはこちら



工学研究科次世代学際院

組織の壁をこえた協働ができる人材の育成を行います

工学研究科次世代学際院（Interdisciplinary Research Institute for the Next Generation, iRING）は、新たな総合知の修得と実践を基盤とした次世代を担う研究者の育成を目的として設置されました。研究科内では、専攻の枠を超えた連携の場を設けるとともに、他部局とのセミナー共催や企業との交流会を開催し、研究を軸とした活発な異分野交流を促進しています。これらの多様な活動が、新たな学際研究の創出につながることが期待されます。



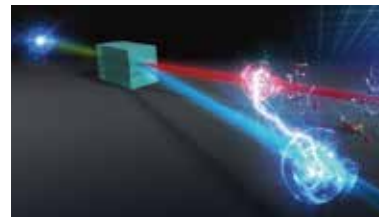
詳しくはこちら



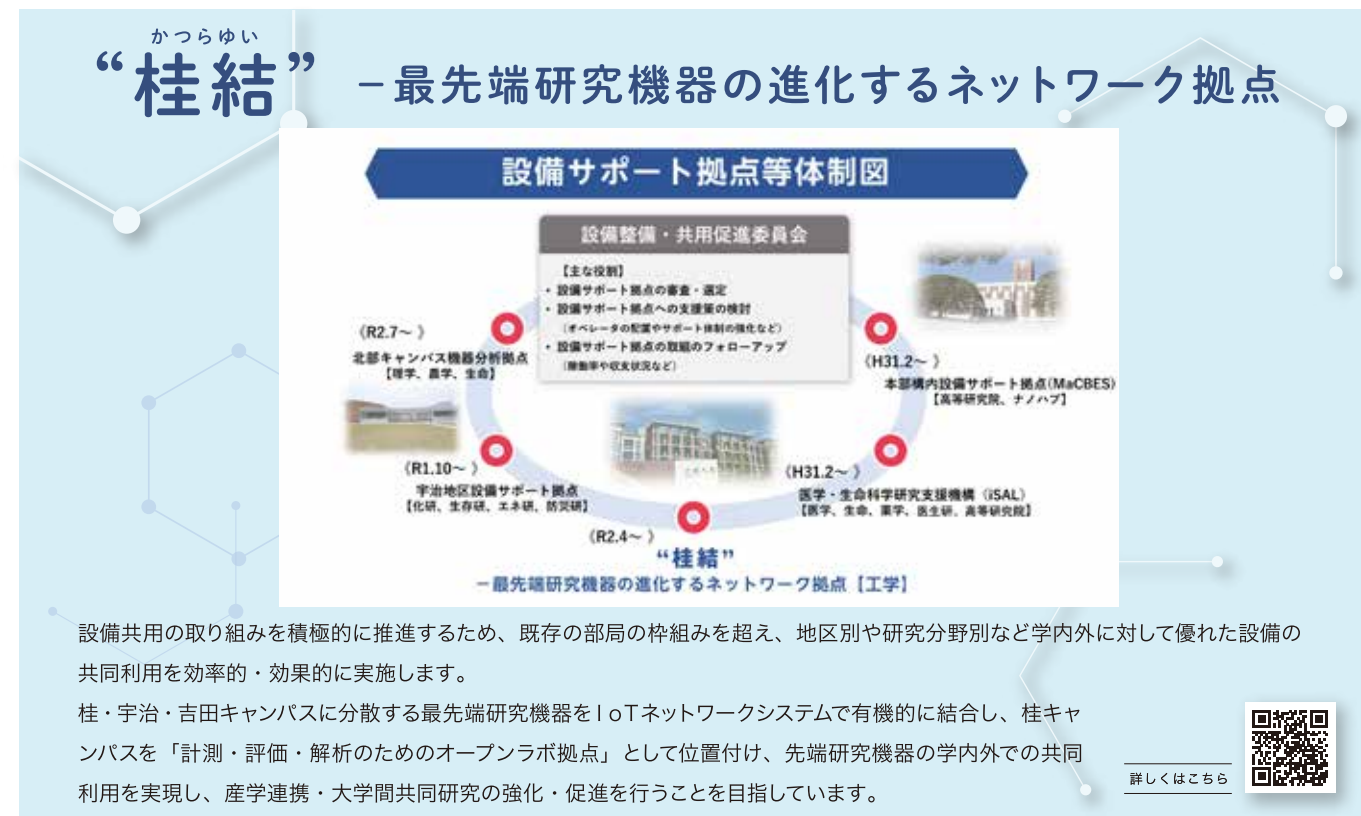
附属光量子センシング教育研究センター

量子もつれ光などを利用する光量子センシングの教育・研究を学内外機関と連携して推進、学術の深化と社会実装を目指します。

量子科学技術は急激に進展しています。京都大学では、量子もつれ光などの「古典電磁気学では記述できない」光を駆使することで、従来の光センシングの感度限界を打破し、新しい機能を実現する「光量子センシング」に関し、量子もつれ顕微鏡や量子赤外分光などを世界にさがかけて実現・発展させてきました。令和5年には「光量子センシング社会実装コンソーシアム」を、成長戦略本部の協力を得て工学研究科に設立し、その社会実装にも取り組んできました。本センターは、総合研究推進本部や成長戦略本部、また理学研究科、医学研究科などの学内組織と密接に協力、また量子技術イノベーション拠点（QIH）などの学外機関とも連携し、光量子センシングの学術の深化、社会実装、および人材育成の世界的な拠点となることを目指します。また卓越大学院「先端光・電子デバイス創成学」等とも連携し、光量子センシングに関する教育を推進します。



詳しくはこちら



9 国際交流の状況

京都大学工学部・工学研究科は、基礎研究を重視して自然環境と調和のとれた科学技術の発展を図るとともに、高度の専門能力と高い倫理性、ならびに豊かな教養と個性を兼ね備えた人材を育成するため、教育・研究における国際交流を推進し、学術・研究の発展を通じて、国際社会へ貢献していきます。

令和8年5月1日現在

部局間協定締結機関

海外研究拠点

京都大学 - 清華大学環境技術共同研究・教育センター 京都大学オンサイトラボラトリー

京都大学 - ナント大学 - ボルドー大学 無機エネルギー材料 京都大学オンサイトラボラトリー

国際交流協定・海外拠点
(学術交流協定/学生交流協定)の詳細はこちら



欧州 (NIS 諸国を含む) (10)	部局間協定締結機関名 (19)	部局間 学術交流 協定	部局間 学生交流 協定
英国	パーミンガム大学 工学研究科等	●	
オランダ王国	デルフト工科大学	●	
スイス連邦	スイス連邦工科大学 チューリッヒ校		●
スウェーデン王国	リンシェーピング大学	●	●
チェコ共和国	チェコ工科大学	●	
ドイツ連邦共和国	ハインリヒ・ハイネ大学 (デュッセルドルフ) 有機化学及び高分子化学研究所 ドルトムント工科大学 生物化学・化学工学部 フライブルク大学 工学部	●	●
ノルウェー王国	ノルウェー科学技術大学	●	
フランス共和国	国立パリ建築大学ラ・ヴィレット校 ピエール・マリー・キュリー大学 (パリ第6大学) →ソルボンヌ大学に統合 レンヌ大学 SPM・ESIR レンヌ大学 IUT de Lannion 地球物理学パリ研究所 国立高等研究実習院 ナミュール大学 パリ工科大学テレコム・パリ	●	●
ポーランド共和国	AGH科学技術大学	●	
イタリア共和国	トリノ工科大学	●	

中東 (1)	部局間協定締結機関名 (1)	部局間 学術交流 協定	部局間 学生交流 協定
アラブ首長国連邦	アラブ首長国連邦大学理学部及び工学部	●	

アフリカ (2)	部局間協定締結機関名 (2)	部局間 学術交流 協定	部局間 学生交流 協定
エジプト・アラブ共和国	カイロアメリカン大学 工学部、工学研究科	●	
ケニア共和国	ジョモケニヤッタ農工大学	●	●

アジア (8)	部局間協定締結機関名 (18)	部局間 学術交流 協定	部局間 学生交流 協定
インド共和国	国立学際科学技術研究所	●	
インドネシア共和国	ブラウヰジャヤ大学 工学部・工学研究科	●	●
タイ王国	アジア工科大学 工業技術研究科等 キングモンクット工科大学トンブリ校 (エネルギー環境合同大学院大学 (JGSEE)) キングモンクット工科大学 ラカバン校 マヒドン大学工学部	●	●
大韓民国	慶熙大学校工学部 韓国建設技術研究院	●	●
台湾	国立成功大学 工学院	●	●
中華人民共和国	大連理工大学 同済大学大学院 香港城市大学 理工学研究科 東南大学研究学院 天津大学理学院 香港中文大学 (深圳) 理工学院 吉林大学	●	●
ベトナム社会主義共和国	ハノイ土木工科大学	●	
マレーシア	マレーシア工科大学 建築都市環境学部等	●	

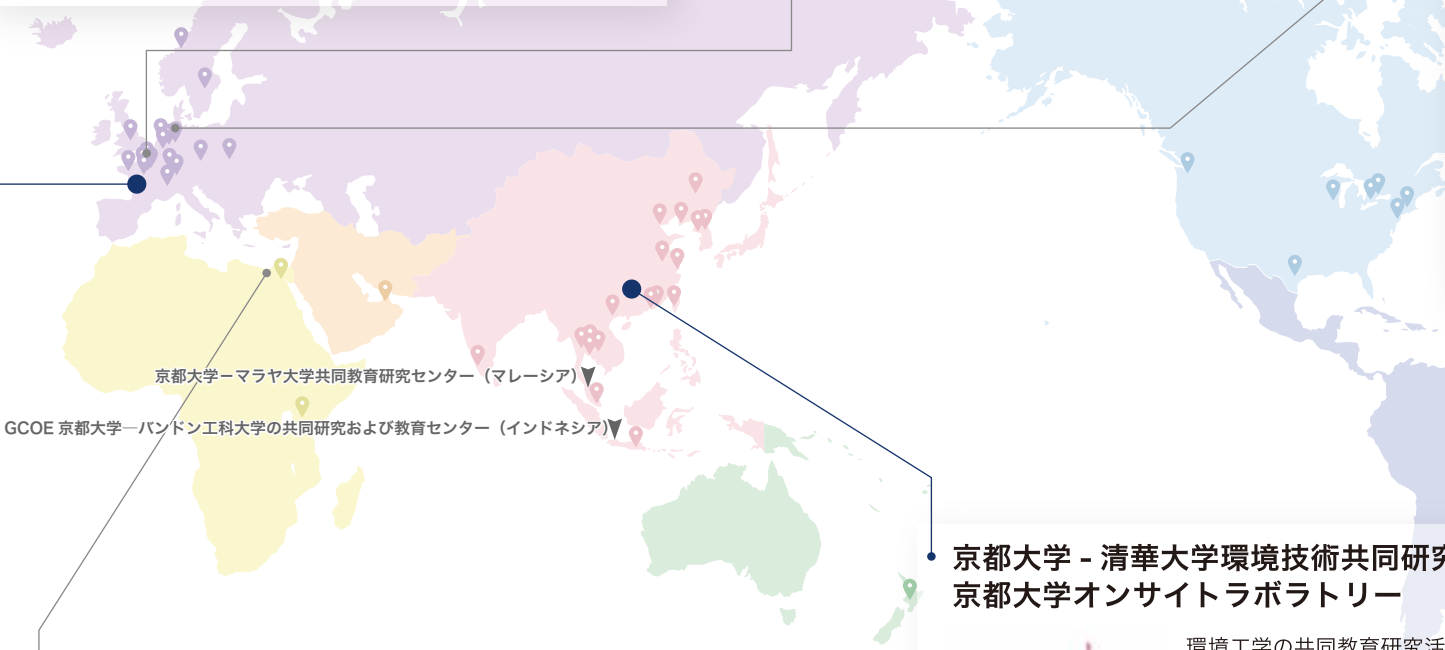
京都大学 - ナント大学 - ボルドー大学 無機エネルギー材料 京都大学オンサイトラボラトリー



©Service Photo - Nantes Université

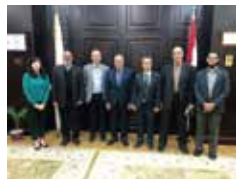


京都大学とフランスのトップ研究機関との間で優秀な学生と若手研究者の交換と教育を促進する拠点を形成するため、2025年9月に京都大学オンサイトラボラトリーに認定されました。2026年1月26日には、京都大学-ナント大学-ボルドー大学のオンサイトラボラトリー（無機エネルギー材料）の開所式を開催しました。3大学の副学長・研究所長をはじめ、ナント市、CNRS本部、JST/JSPS/京大欧州拠点など、多くの来賓にご参加いただきました。第2部では、ナント市のご厚意により、市庁舎での晩餐会が催されました。



エジプト日本科学技術大学 (E-JUST)

JICA と連携して日本とエジプト両国の連携事業である「エジプト日本科学技術大学 (E-JUST)」プロジェクトを支援しています。



E-JUST 訪問



先端マイクロ化学夏季講習会

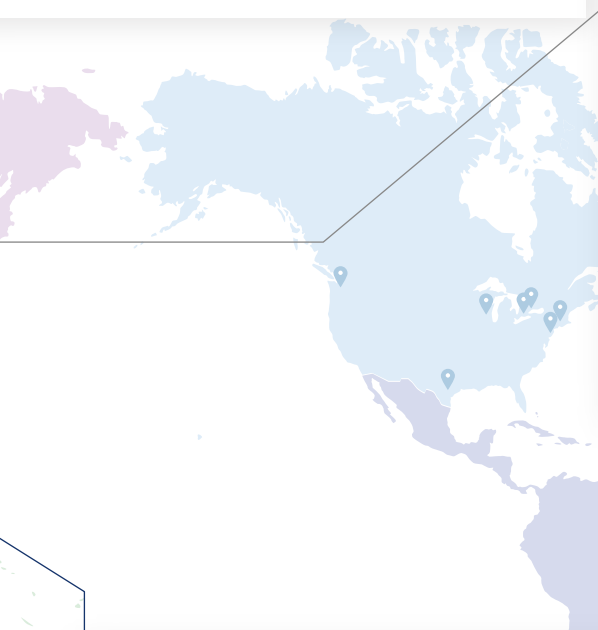


国立パリ建築大学ラ・ヴィレット校との 合同ワークショップ

毎回テーマを設定し、建築系研究室の学生が国立パリ建築大学ラ・ヴィレット校の学生とともに、パリを舞台に現地調査、ディスカッション、プレゼンテーションを行うワークショップを行っています。



パリ市内における歩行調査の様子



京都大学 - 清華大学環境技術共同研究・教育センター 京都大学オンサイトラボラトリー



日中環境技術共同研究・教育シンポジウム



センター設置調印式

環境工学の共同教育研究活動を行うことで環境問題の解決を目指すため、2018 年 12 月に京都大学オンサイトラボラトリーに認定されました。持続可能な社会に必要なとされる環境技術の研究開発を清華大学深圳国際研究生院と共同で推進するとともに、民間企業等との共同研究を推進するためのリエゾンオフィスの役割も果たしています。2022 年度より、修士課程ダブルディグリープログラムを開始しました。また、京都大学学生のための中国でのインターンシップ研修先や清華大学学生の日本でのインターンシップ窓口としての機能も備えています。



北米 (2)	部局間協定締結機関名 (7)	部局間 学術交流 協定	部局間 学生交流 協定
アメリカ合衆国	ウィスコンシン大学 マディソン校 工学部 ワシントン大学 工学部 テキサス大学 オースティン校 工学部 レンスラー工科大学 工学部 ニューヨーク・シティ大学 エネルギー研究所	●	
カナダ	ウエスタンオンタリオ大学 工学部・理学部 トロント大学 理工学部	●	●

中南米 (1)	部局間協定締結機関名 (1)	部局間 学術交流 協定	部局間 学生交流 協定
ブラジル連邦共和国	サンパウロ大学 工学部・工学研究科	●	

大洋州 (1)	部局間協定締結機関名 (1)	部局間 学術交流 協定	部局間 学生交流 協定
ニュージーランド	ウェリントン・ビクトリア大学 理学部・工学部・建築デザイン学部、ロビンソン研究所、フェリエ研究所	●	●

国際インターンシッププログラム



TUD 生最終報告会



ドルトムント中心部

ドイツのドルトムント工科大学との国際インターンシッププログラムを 1990 年以来継続して行っています (化学理工学専攻)。日本人学生はドイツにて、ドイツ人学生は日本にて、両大学のプログラムコーディネーターが用意した企業で2カ月間のインターンシップを行います。日本人学生はドルトムント工科大学で、ドイツ人学生は京都大学で、オリエンテーションと最終報告会を行い、それぞれの大学で単位認定しています。



京都大学卓越大学院プログラム 「先端光・電子デバイス創成学」

「物理限界への挑戦と情報・省エネルギー社会への展開」を共通理念として先端光・電子デバイスおよび関連する学問分野を強い責任感と高い倫理性を持って牽引できる国際的リーダーの育成を目指す5年一貫の博士課程学位プログラムを有しています。



国際セミナー道場



京都大学の海外機関
との交流協定はこちら



10 京大工学基金のご紹介

京都大学工学部・工学研究科が設置している「京大工学基金」をご紹介します。本基金を活用し、美しい景観のテクノサイエンスヒル桂で、研究インフラの整備や福利厚生施設などの充実を図り、高度な専門性と豊かな創造性を持つ、未来の工学を担える人材を育成します。

京大工学基金とは

「基礎となる学理をしっかりと学んでおくことが、将来の幅広い応用展開や発展を可能とするために必要である」という教育理念を堅持し、より地球にやさしい科学技術の創成・発展を担い、明るい未来を創っていくことが「工学」の使命だと考えています。

この使命感のもと、京都大学工学部・工学研究科では、確固たる基礎知識に基づいた高度な専門性と豊かな創造性を持ち、高い品格を兼ね備えた若き優秀な人材の育成に努めています。

工学研究科が桂キャンパスに移転してから、20年以上が経ちます。桂キャンパスは自然環境に恵まれた美しい広大なキャンパスですが、寮などの福利厚生施設が充実しておらず、また、吉田キャンパスと地理的に離れていることによって、教育・研究を進めるうえでさまざまな困難を生んでいることも事実です。

この現状をあらゆる手段をもって乗り越えていくため、本基金を設置しました。

本基金を活用し、桂図書館を中核とする情報交流ネットワーク・データ科学教育施設や福利厚生施設の充実をはじめ、学生や若手研究者が研究や課外活動に専心できる環境の整備・維持を図り、未来の工学を担える人材を育成していきます。

今後なお一層の京都大学工学部・工学研究科へのご支援を賜りますよう、お願い申し上げます。

ご寄附の方法

Web申込または銀行窓口での振り込みが可能です。
詳細は工学HPからご確認ください。



京大工学基金の使途

教育支援	・仮想現実感を使った安全講習や実験前説等整備 ・多言語翻訳授業支援システムの開発 ・24時間学習室の設置 ・アクティブラーニングルーム等の学部生学習環境の整備	若手研究者育成支援	・青藍プログラムの支援 ・若手研究者の海外長期滞在費補助 ・新規研究立上げ補助 など
福利厚生施設整備	・留学生・邦人学生混住寮、運動施設の整備など 福利厚生施設の充実 ・学生の心・健康のケアのための保健室の運営支援	国際交流	・外国人研究者の宿泊施設 ・On-site Laboratoryの設立・運営支援、海外交流促進
研究インフラ整備	・桂図書館の機能充実 ・情報ネットワークの進化 ・オープンデータの促進 など	産学連携	・地域との連携 ・ベンチャー立ち上げ支援 など

11 工学部・工学研究科の同窓会

同窓会は各専攻、学科の出身者、教員、元教員（会によっては在學生も含む）で構成され、総会、講演会等を通じて会員相互の交流と親睦を図っています。工学部・工学研究科に関連する同窓会組織は、以下のとおりです。同窓会組織の関係者等により構成された工学系同窓会連絡会も設置し、同窓会の連携組織として、京都大学および工学部と大学院各研究科の発展、京都大学同窓会との橋渡し、幅広い人的ネットワークの醸成などに寄与する事業を推進します。

工学部・工学研究科に関連する同窓会組織

- | | |
|--------------------------|---------------------------|
| ■ 京都大学土木会（京土会） | ■ 合成化学科・合成生物化学専攻同窓会 |
| ■ 京機会（京都大学機械系同窓会） | ■ 洛朋会（物エネ・石化・燃化同窓会） |
| ■ 洛友会（工学部電気系教室同窓会） | ■ 無機材料系研究室同窓会 |
| ■ 水曜会（旧資源・金属系教室同窓会） | ■ 京都大学航空宇宙応物同窓会 |
| ■ 京大建築会（建築系教室同窓会） | ■ けしの実会（原子核工学教室同窓会） |
| ■ 工化会（化学系専攻・学科同窓会） | ■ 京都大学数理会（情報学科数理工学コース同窓会） |
| ■ 洛窓会（化学工学専攻・旧化学工学科等同窓会） | ■ 情洛会（情報学科計算機科学コース同窓会） |

京都大学同窓会HP

各同窓会の詳細はリンク先HPからご確認ください

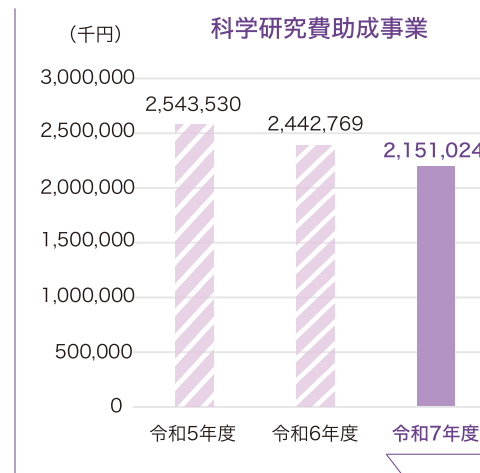
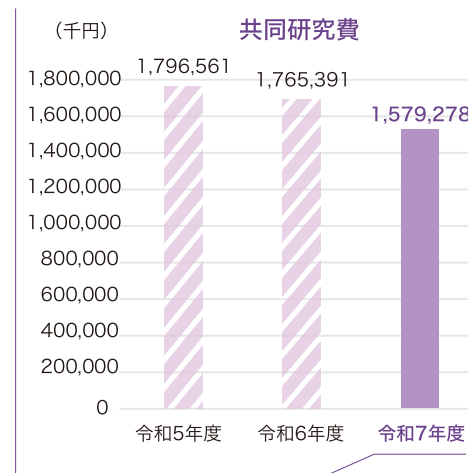
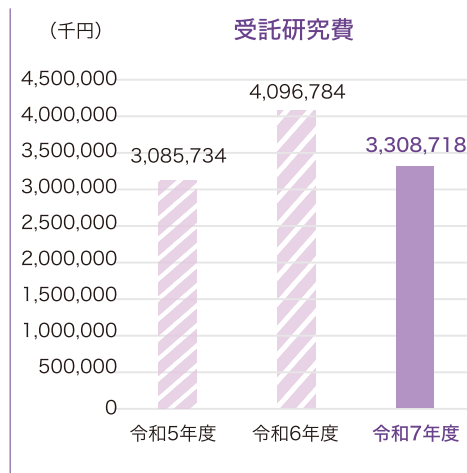
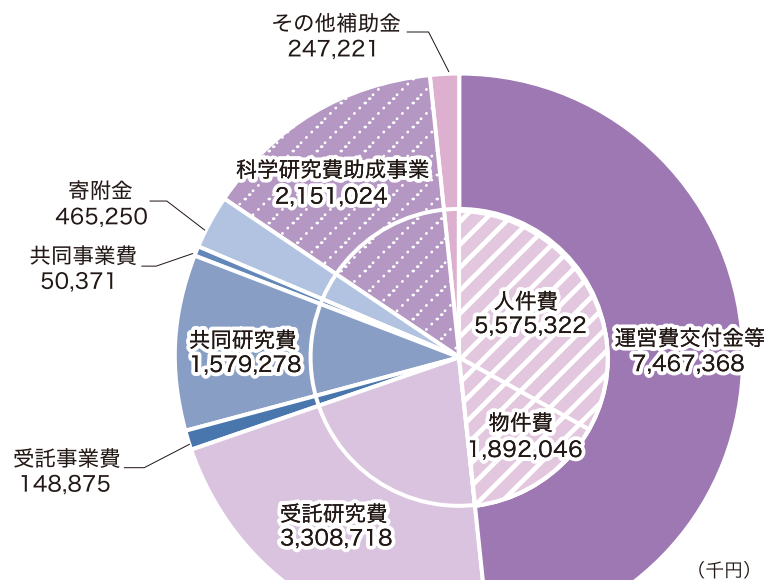


12 財政状況

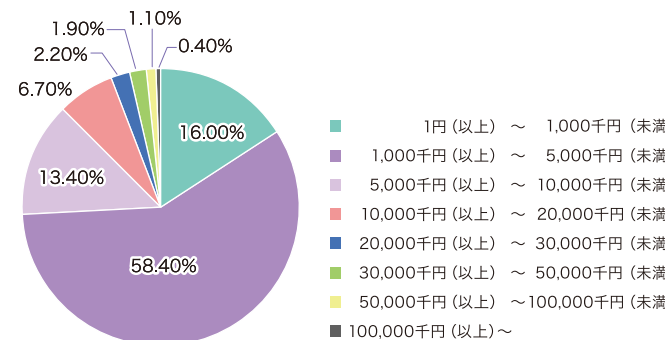
京都大学工学研究科は、京都大学の中でも最大級の予算規模を有する部局です。令和7年度事業費の概況をお示しします。

令和7年度事業費

区 分	金 額（千円）
運営費交付金等	7,467,368
人件費	5,575,322
物件費	1,892,046
受託研究費	3,308,718
受託事業費	148,875
共同研究費	1,579,278
共同事業費	50,371
寄附金	465,250
科学研究費助成事業	2,151,024
その他補助金	247,221
その他大型プロジェクト	0
合 計	15,418,105



令和7年度 共同研究費 内訳（金額別）



令和7年度 科学研究費助成事業 内訳

区 分	採択件数	金額（千円）
特別推進研究	2	187,720
新学術領域研究・学術変革領域研究(A)(B)	23	212,420
基盤研究(S)	6	250,510
基盤研究(A)(B)(C)	181	1,032,369
若手研究	54	81,757
特別研究員奨励費	88	81,764
その他	59	304,484
合計	413	2,151,024

教職員数

教員						(黒字：桂地区、青字：吉田地区等) 令和 8 年 5 月 1 日現在					
区 分	教 授	准教授	講 師	助 教	合 計						
社会基盤工学専攻	10 (4)	13 (1)		14 (1)	37 (6)						
都市社会工学専攻	8 (3)	9		8	25 (3)						
都市環境工学専攻	5 (1)	5 (1)	2	9 (1)	21 (3)						
建築学専攻	15	12	2	11	40						
機械理工学専攻	13	11	3	11	38						
マイクロエンジニアリング専攻	5	5	2	4	16						
航空宇宙工学専攻	6	3 (1)	1	3	13 (1)						
原子核工学専攻	6	3	2	3	14						
材料工学専攻	8	7	1	10	26						
電気電子デジタル理工学専攻	16	13 (1)	1	9	39 (1)						
化学理工学専攻	37 (2)	34	9 (1)	53 (1)	133 (4)						
附属光・電子理工学教育研究センター	1	1			2						
附属流域総合環境質研究センター	1	1		3	5						
附属量子理工学教育研究センター	1	1			2						
附属桂インテックセンター											
附属情報センター											
附属環境安全衛生センター			[1]	[1]							[2]
附属工学基盤教育研究センター	1			5	6						
合 計	133 (10)	118 (4)[1]	28 (1) [1]	138 (3)	417 (18)[2]						
桂地区 合 計	123 (10)	109 (4)[1]	27 (1) [1]	125 (3)	384 (18)[2]						
吉田地区等 合 計	10	9	1	13	33						

注 1：表中の（ ）内は大学院地球環境学堂、大学院経営管理研究部、国際高等教育院の流動教員で外数
注 2：表中の〔 〕内は兼務教員で外数 注 3：特定有期雇用教員を含む

職員

職員					(黒字：桂地区、青字：吉田地区等) 令和 8 年 5 月 1 日現在				
区 分	事務職員	技術職員	特定研究員	合 計					
社会基盤工学専攻	5			5					
都市社会工学専攻	5			5					
都市環境工学専攻			2	2					
建築学専攻	2		3	5					
機械理工学専攻	4		3	7					
マイクロエンジニアリング専攻	3			3					
航空宇宙工学専攻									
原子核工学専攻									
地球工学科									
建築学科									
材料工学専攻	5		5	10					
物理工学科									
電気電子デジタル理工学専攻	2		3	5					
化学理工学専攻	21		24	45					
電気電子工学科									
理工化学科									
情報学科									
附属流域総合環境質研究センター			2	2					
附属量子理工学教育研究センター									
工学研究科技術室		36		36					
桂地区 (工学研究科) 事務部：桂	106	4		110					
桂地区 (工学研究科) 事務部：吉田	19			19					
合 計	172	40	42	254					
桂地区 合 計	148	40	35	223					
吉田地区等 合 計	24		7	31					

注：特定職員、再雇用職員、支援職員を含む

学生数

大学院										(黒字：桂地区、青字：吉田地区等) 令和 8 年 5 月 1 日現在									
区 分	修士課程		博士後期課程						合 計										
	1 年次	2 年次	1 年次 4 月入学	2 年次 10 月入学	1 年次 4 月入学	2 年次 10 月入学	3 年次 4 月入学	3 年次 10 月入学	4 月入学	10 月入学									
社会基盤工学専攻	70	68	22	4	21	7	19	7	200	[18]									
都市社会工学専攻	53	55	11	8	17	8	26	9	162	[25]									
都市環境工学専攻	37 [1]	38	6	7	2	7	13	9	96	[24]									
建築学専攻	78	83	16	1	11	2	22	9	210	[12]									
機械理工学専攻	53	63	7	4	10	1	20	5	153	[10]									
マイクロエンジニアリング専攻	32	35	6	1	4	1	11	1	88	[3]									
航空宇宙工学専攻	21	23	4	1			4		52	[1]									
原子核工学専攻	26	27	5	1	4	3	8	1	70	[5]									
材料工学専攻	41	45	7		7	2	4		104	[2]									
電気工学専攻		38			9	1	5	1	52	[2]									
電子工学専攻		38		1	6	1	7	1	51	[3]									
電気電子デジタル理工学専攻	89		14						103										
材料化学専攻		29		1	2	1	9		40	[2]									
物質エネルギー化学専攻	39				11	4	25	1	75	[5]									
分子工学専攻	38			5	11	1	12	1	61	[7]									
高分子化学専攻	49			1	7	1	11	2	67	[4]									
合成・生物化学専攻	34				6	1	10	5	50	[6]									
化学工学専攻		31		1	3		6	2	40	[3]									
化学理工学専攻	221		51						272										
合 計	721 [1]	733	149	36	131	41	212	54	1,946	[132]									
桂地区 合 計	680 [1]	688	142	36	124	39	208	54	1,842	[130]									
吉田地区等 合 計	41	45	7		7	2	4		104	[2]									

注：表中の〔 〕内は 10 月入学者数で外数

学部

学部						令和 8 年 5 月 1 日現在					
区 分	1 年次	2 年次	3 年次	4 年次	合 計						
地球工学科	187	186	187	236	796						
建築学科	84	85	83	105	357						
物理工学科	238	239	242	294	1,013						
電気電子工学科	146	133	131	169	579						
情報学科	102	94	92	120	408						
理工化学科	243	240	243	324	1,050						
合 計	1,000	977	978	1,248	4,203						

令和8年度入学状況

大学院

区 分	修 士 課 程		
	入学定員	入学志願者	入学者
社会基盤工学専攻	58		70 [6]
都市社会工学専攻	57	144 [22]	53 [6]
都市環境工学専攻	36	44 [12]	38 [10]
建築学専攻	75	95 [7]	78 [6]
機械理工学専攻	59		53 [3]
マイクロエンジニアリング専攻	30	130 [5]	32
航空宇宙工学専攻	24		21
原子核工学専攻	23	36 [4]	26 [1]
材料工学専攻	38	46	41
電気電子デジタル理工学専攻	93	124 [13]	89 [6]
化学理工学専攻	215	257 [16]	221 [12]
合 計	708	876 [79]	722 [50]

注：表中の〔 〕内は外国人留学生で内数

区 分	博 士 後 期 課 程		
	入学定員	入学志願者	入学者
社会基盤工学専攻	17	29 (8) [14]	26 (8) [12]
都市社会工学専攻	17	16 (3) [9]	19 (5) [11]
都市環境工学専攻	10	20 (4) [13]	13 (2) [8]
建築学専攻	22	18 (2) [4]	17 (2) [6]
機械理工学専攻	16	11 (2) [5]	11 (2) [5]
マイクロエンジニアリング専攻	7	8 [2]	8 [2]
航空宇宙工学専攻	7	5 (3) [1]	5 (3) [1]
原子核工学専攻	9	7 (1) [4]	6 (1) [3]
材料工学専攻	10	9 [6]	7 [4]
電気工学専攻			
電子工学専攻		1 (1)	1 (1)
電気電子デジタル理工学専攻	22	15 (1)	14
材料化学専攻		2 [2]	1 [1]
物質エネルギー化学専攻		1 [1]	
分子工学専攻		6 [5]	5 [4]
高分子化学専攻		1 (1)	1 (1)
合成・生物化学専攻			
化学工学専攻		1 [1]	1 [1]
化学理工学専攻	62	54 (1) [4]	51 (1) [4]
合 計	199	204 (27) [71]	186 (26) [62]

注 1：表中の（ ）内は社会人特別選抜で内数、〔 〕内は外国人留学生で内数
注 2：入学志願者数と入学者数は令和 7 年度 10 月期と令和 8 年度 4 月期の合計

学部

区 分	入学定員	入学志願者	入学者		
			男	女	計
地球工学科	185	480[54]	164[11]	23[6]	187[17]
建築学科	80	307[2]	62	23[2]	85[2]
物理工学科	235	915[19]	223[2]	15[1]	238[3]
電気電子工学科	142	480[24]	133[4]	13[2]	146[6]
情報学科	98	423[2]	100[1]	3[1]	103[2]
理工化学科	235	397[22]	211[7]	34[5]	245[12]
合 計	975	3,002[123]	893[25]	111[17]	1,004[42]

注 1：表中の〔 〕内は外国人留学生で内数 注 2：入学志願者は第 1 志望学科

卒業・修了状況及び学位授与者数

大学院

区 分	修士課程		博士 後期課程	区 分		工学博士
	令和 7 年度	累 計	令和 8 年 5 月 1 日現在 研究指導認定 進学希望計	旧制	大正 9 年 6 月以前の 学位令によるもの 大正 9 年 7 月以降の 学位令によるもの	42[28] 1,380
工業化学専攻		1,263	212	新制	大学院博士課程修了者 論文提出によるもの	5,543 4,226
石油化学専攻		758	137		合 計	11,191[28]
合成化学専攻		582	163		注：表中の〔 〕内は推薦によるもので内数	
機械工学専攻		1,154	78	学部		
物理工学専攻		462	38			
機械物理工学専攻		212	6	区 分		
精密工学専攻		860	56			
冶金学専攻		634	47	令和 7 年度		累 計
金属加工工学専攻		567	43	土木工学科		3,222
エネルギー応用工学専攻		57	2	機械工学科		2,122
航空工学専攻		388	32	電気工学科		2,112
電子物性工学専攻		227	15	鉱山学科		357
電気工学第二専攻		730	67	資源工学科		1,073
電子通信工学専攻		110	2	冶金学科		1,532
数理工学専攻		785	84	工業化学科		2,125
情報工学専攻		508	44	建築学科		2,207
応用システム科学専攻		342	10	燃料化学科		443
土木工学専攻	1,996	143		石油化学科		1,296
交通土木工学専攻	598	14		化学機械学科		295
土木システム工学専攻	240	23		化学工学科		1,244
資源工学専攻	681	40		高分子化学科		1,225
衛生工学専攻	620	54		繊維化学科		250
環境工学専攻	205	8		応用物理学科		116
環境地球工学専攻	501	30		電子工学科		1,606
建築学第二専攻	514	51		航空工学科		810
生活空間学専攻	159	17		原子核工学科		714
材料化学専攻	25	888	41	衛生工学科		1,390
物質エネルギー化学専攻	38	1,153	83	数理工学科		1,448
分子工学専攻	30	1,192	71	精密工学科		1,379
高分子化学専攻	43	2,364	305	合成化学科		1,259
合成・生物化学専攻	23	951	97	電気工学第二科		1,447
化学工学専攻	36	1,783	133	金属加工学科		1,220
原子核工学専攻	23	1,329	174	機械工学第二科		505
材料工学専攻	40	1,179	25	交通土木工学科		1,284
電気工学専攻	33	1,792	118	建築学第二科		1,149
電子工学専攻	30	1,534	102	情報工学科		1,037
建築学専攻	66	2,687	220	物理工学科		480
社会基盤工学専攻	76	1,426	68	(新) 工業化学科		6,268
都市社会工学専攻	51	1,230	59	(新) 物理工学科	222	6,323
都市環境工学専攻	33	1,126	54	電気電子工学科	133	3,430
機械理工学専攻	52	1,141	61	情報学科	94	2,309
マイクロエンジニアリング専攻	31	543	35	地球工学科	172	4,628
航空宇宙工学専攻	22	614	36	(新) 建築学科	75	2,046
合 計	652	38,085	3,098	理工化学科	231	220
				合 計	927	60,571

外国人留学生・招へい外国人学者

外国人留学生受入状況令和8年5月1日現在

国・地域	学 部	大学院		合 計
		修士課程	博士後期課程	
アジア（17）				
インド共和国	2		5	7
インドネシア共和国	15	5	19	39
シンガポール共和国	1	1	1	3
スリランカ民主社会主義共和国	1		4	5
タイ王国	4	2	9	15
大韓民国	10	7	17	34
台湾	8	5	11	24
中華人民共和国	73	57	136	266
ネパール			1	1
パキスタン・イスラム共和国			1	1
バングラデシュ人民共和国	1	1	2	4
フィリピン共和国	4	2	6	12
ベトナム社会主義共和国	3	1	8	12
香港		1	1	2
マレーシア	1	1	4	6
ミャンマー連邦共和国	6	1	4	11
モンゴル国	1	1		2
中東（2）				
イラン・イスラム共和国		1	2	3
オマーン国			1	1
アフリカ（8）				
アルジェリア民主人民共和国			2	2
エジプト・アラブ共和国			1	1
エスワティニ王国			1	1
エチオピア連邦民主共和国			1	1
ケニア共和国			2	2
タンザニア連合共和国			1	1
チュニジア共和国			1	1
マダガスカル共和国			1	1
大洋州（2）				
サモア独立国		1		1
ソロモン諸島			1	1
北米（2）				
アメリカ合衆国	1	2	2	5
カナダ	2		1	3
中南米（5）				
エルサルバドル共和国		1	1	2
コロンビア共和国			1	1
ブラジル連邦共和国	1		3	4
ペルー共和国		1	1	2
モザンビーク共和国		1		1
欧州（NIS諸国を含む）（5）				
英国			1	1
オランダ王国			1	1
スペイン王国			1	1
セルビア共和国			1	1
フランス共和国			4	4
合 計（41カ国・地域）	134	92	260	486

注：表中の国・地域名は国籍を基準とする

外国人研究留学生等受入状況令和8年5月1日現在

国・地域	研究生	特別聴講学生	特別研究学生	短期交流学生	合 計
アジア（9）					
インド共和国			1	1	2
カンボジア王国	1				1
大韓民国		1			1
台湾	2	1			3
中華人民共和国	7		7	4	18
ネパール	1				1
フィリピン共和国	1				1
ベトナム社会主義共和国	1				1
ミャンマー連邦共和国	1				1
中東（1）					
トルコ共和国	1				1
アフリカ（2）					
エジプト・アラブ共和国	1				1
ベナン共和国	1				1
欧州（NIS諸国を含む）（6）					
イタリア共和国		1	1		2
スイス連邦			1		1
スウェーデン王国		1			1
スペイン王国			1		1
ドイツ連邦共和国		1	1	1	3
フランス共和国	1	3	2	6	12
合 計（18カ国・地域）	18	8	14	12	52

注：表中の国・地域名は国籍を基準とする

招へい外国人学者等受入者数令和7年度

国・地域	招へい外国人学者	外国人共同研究者	外国人研究員	合 計
アジア（8）				
インド共和国	1	6		7
インドネシア共和国		1		1
タイ王国	1	3		4
マレーシア	1	1		2
大韓民国	4	1		5
台湾	4	2		6
中華人民共和国	4	19		23
日本		1		1
中東（2）				
イスラエル国	1			1
イラン・イスラム共和国		2		2
アフリカ（2）				
アルジェリア民主人民共和国		1		1
モロッコ王国		2		2
大洋州（1）				
オーストラリア連邦	1			1
北米（2）				
アメリカ合衆国	5	3		8
カナダ	1	4		5
中南米（1）				
ブラジル連邦共和国		2		2
欧州（NIS諸国を含む）（10）				
イタリア共和国		4		4
英国		5		5
オーストリア共和国	1			1
スイス連邦			1	1
スウェーデン王国	1	2		3
スペイン王国	1	1		2
ドイツ連邦共和国	1	10		11
フランス共和国	4	6		10
ベルギー王国	2			2
ポーランド共和国		1	1	2
合 計（26カ国・地域）	33	77	2	112

注：表中の国・地域名は国籍を基準とする

研究生

研究生等受入状況令和8年5月1日現在

区 分	研究生	研修員等	特別聴講学生	特別研究学生	短期交流学生	合 計
社会基盤工学専攻	3 [2]		1 [1]			4 [3]
都市社会工学専攻	3 [3]	1	1 [1]	1 [1]		6 [5]
都市環境工学専攻	2 [2]			2 [2]	4 [4]	8 [8]
建築学専攻	5 [3]	3	3 [3]	2 [1]		13 [7]
機械理工学専攻	2 [2]	1			1 [1]	4 [3]
マイクロエンジニアリング専攻	1 [1]					1 [1]
航空宇宙工学専攻						
原子核工学専攻				6 [6]		6 [6]
材料工学専攻		1				1
電子工学専攻				1 [1]		1 [1]
電気電子デジタル理工学専攻	1 [1]	2 [2]	1 [1]	1 [1]		5 [5]
化学理工学専攻	4 [4]			5 [5]		9 [9]
地球工学科						
建築学科						
物理工学科					1 [1]	1 [1]
電気電子工学科			1 [1]		1 [1]	2 [2]
情報学科			1 [1]		1 [1]	2 [2]
理工化学科					4 [4]	4 [4]
合 計	21 [18]	8 [2]	8 [8]	18 [17]	12 [12]	67 [57]

注1：表中の[]内は外国人で内数

注2：研修員等は研修員、受託研究員等、日本学術振興会特別研究員（PD）等を含む

蔵書数

蔵書数及び所蔵雑誌種類数令和8年5月1日現在

図書室名等	蔵書数			所蔵雑誌種類数		
	和 書	洋 書	合 計	和 書	洋 書	合 計
桂図書館	126,877	194,407	321,284	2,474	5,454	7,928
工学研究科・工学部北図書室	10,796	1,428	12,224	24	4	28
工学研究科・工学部南図書室	27,339	26,859	54,198	828	772	1,600
合 計	165,012	222,694	387,706	3,326	6,230	9,556

本学 HP